

令和7年度

「子どもの主体性を育む保育」の事例調査研究
調査報告書

令和7年3月

浜田市と島根県立大学の共同研究事業

1. 背景

乳幼児期の子どもの主体性を育むことは、学童期以降の学びを意欲的に進めていく姿勢へとつながるため重要である。近年、一斉指導的な保育から子どもの興味関心に沿った子ども主体の保育への転換が求められている。

浜田市では幼児教育センター（2023年4月開設）を拠点とし、市全体の保育の質向上に取り組んでいる。その中で、保育現場では子ども主体の保育への転換を図る重要性は認識しつつも、実際の保育実践において何をどのように進めていけばよいか、模索している施設が多い、ことが見えてきている。

そのため、「子どもの主体性を育む保育」に向けた保育方法、保育環境等のあり方を調査・研究し、保育の質向上に活かしていきたいと考えている。

2. 目的

「子どもの主体性を育む保育」を進めていくために、保育現場では職員体制、保育環境をどのように整備し、また課題をどのように解決したかについて、調査・研究を行う。特に、「子どもが主体的にかかわる環境づくり」に焦点をあて、保育の環境づくりに対する保育者の困り感とその背景を明らかにする。

3. 方法

以下の2つの調査を行った。

調査①：環境構成に対する保育者の困り感の要因の検討（アンケート調査）

- ・対象は、浜田市内の幼稚園・保育所・認定こども園、28か所
- ・管理職向けアンケートと保育者向けアンケートの2種類を行う。
管理職向け質問項目：14問（施設体制、職員連携、現在の環境づくりの課題について）
保育者向け質問項目：20問（保育環境の意義や必要性、保育の準備、保育室や遊び場の環境構成について）
- ・2025年10月
- ・依頼状を各施設へ郵送し、回答はGoogleフォームにより行う形式とした。
- ・分析方法：記述統計および自由記述をそれぞれカテゴリー化し分析した。

調査②：保育環境の困り感の具体的事例収集と改善方法の検討（実地調査）

- ・「子どもの主体性を育む保育」に取り組むA保育所（1か所）
- ・2026年1月
- ・聞き取りおよび改善事例の検討
⇒子どもの主体的な活動を引き出す保育の具体的な取り組み内容と保育者の思い
- ・分析方法：取り組みの内容・変化・課題の3つの視点から質的記述的に分析した。

4. 倫理的配慮

調査①については、調査協力者に、研究の目的と方法、プライバシーへの配慮、研究協力の有無によって不利益を被らないこと、結果の公表方法等について文書で説明し、同意を得た上で自由意思に基づき調査に協力してもらった。調査②については、調査協力園の園長に、研究の目的と方法、プライバシーへの配慮、研究協力の有無によって不利益を被らないこと、結果の公表方法等について文書及び口頭で説明をし、同意を得た上で調査に協力してもらった。

調査に当たり、島根県立大学・島根県立大学短期大学部松江キャンパス倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：44）

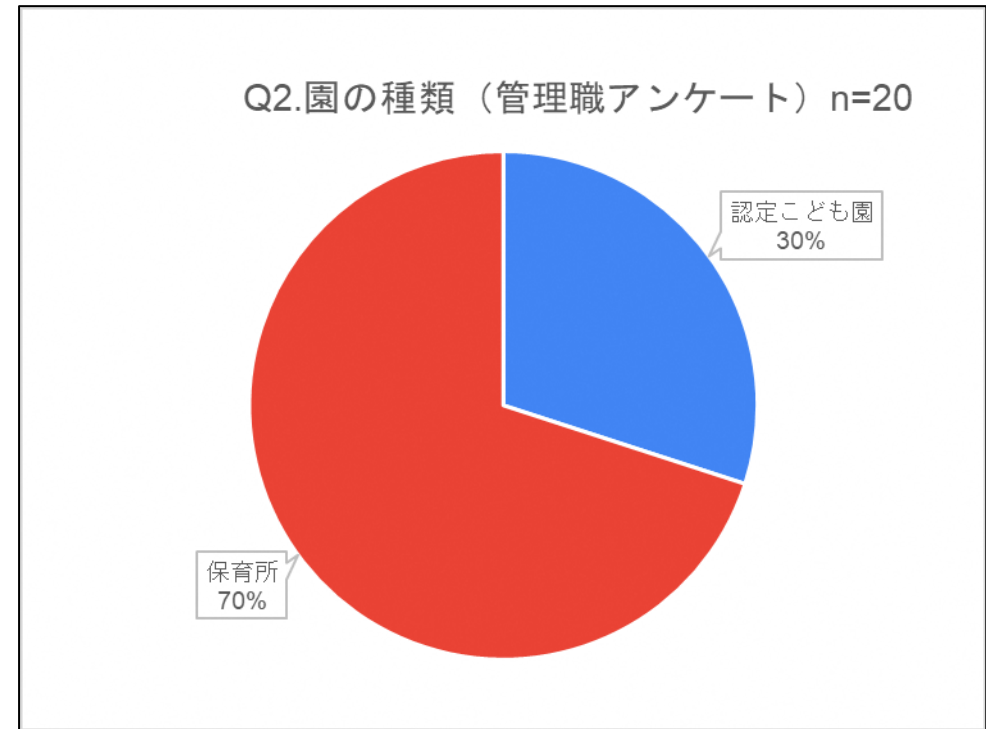
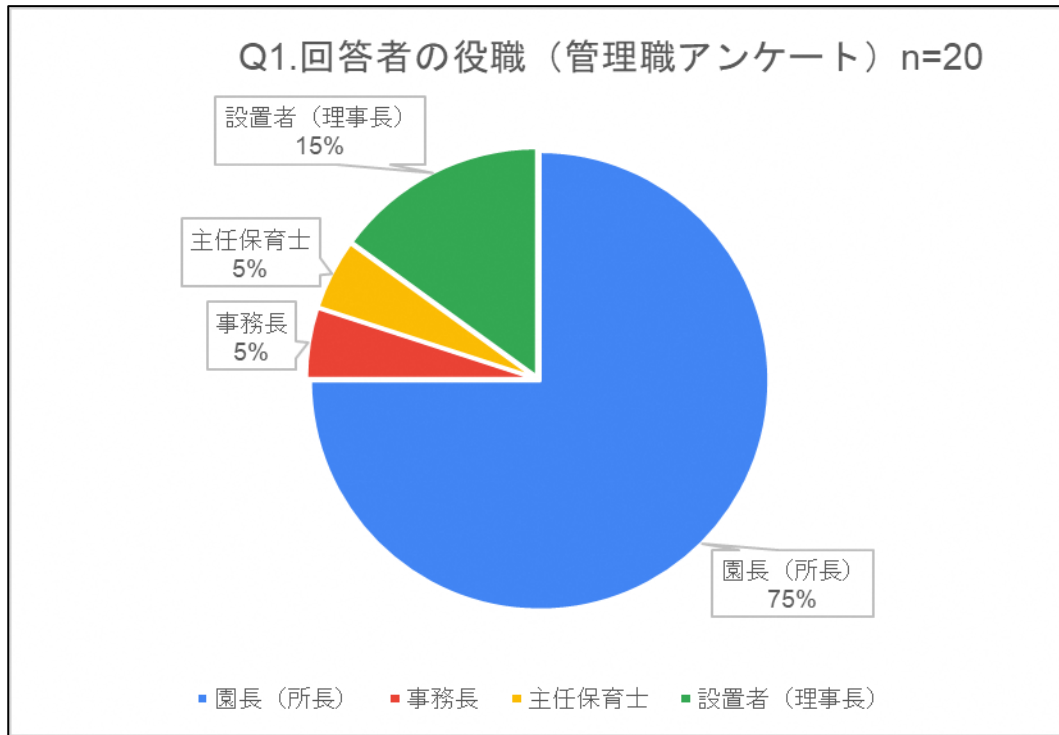
5. 結果：調査①

調査①：環境構成に対する保育者の困り感の要因の検討（アンケート調査）

★管理職向けアンケート

- ・ 28か所送付，20か所回答（回収率71.4%）
- ・ 分析の際、それぞれの質問において完全回答のみを分析対象として分析を行った。

回答者の属性



設置・運営主体

公設公営0，公設民営4，民設民営14，その他2

在園児数及びクラス数，保育者数（クラス担任，フリー保育士）

★在園児数 n=18

| 在園児数 | 園数 |
|-----------|----|
| 20人未満 | 2 |
| 20～30人未満 | 2 |
| 31～60人未満 | 6 |
| 61～100人未満 | 7 |
| 100人以上 | 1 |

18

★クラス数 n=18

| クラス数 | 園数 |
|------|----|
| 2クラス | 2 |
| 4クラス | 1 |
| 5クラス | 3 |
| 6クラス | 12 |

18

★保育者の数 n=20

| 保育者の人数 | 園数 |
|----------|----|
| 5人未満 | 2 |
| 6～10人未満 | 4 |
| 10～15人未満 | 12 |
| 15人以上 | 2 |

20

在園児数60人未満の園が、10園（55.5%）である。
クラス数は、6クラスの園が12園（66.7%）で最も多い。

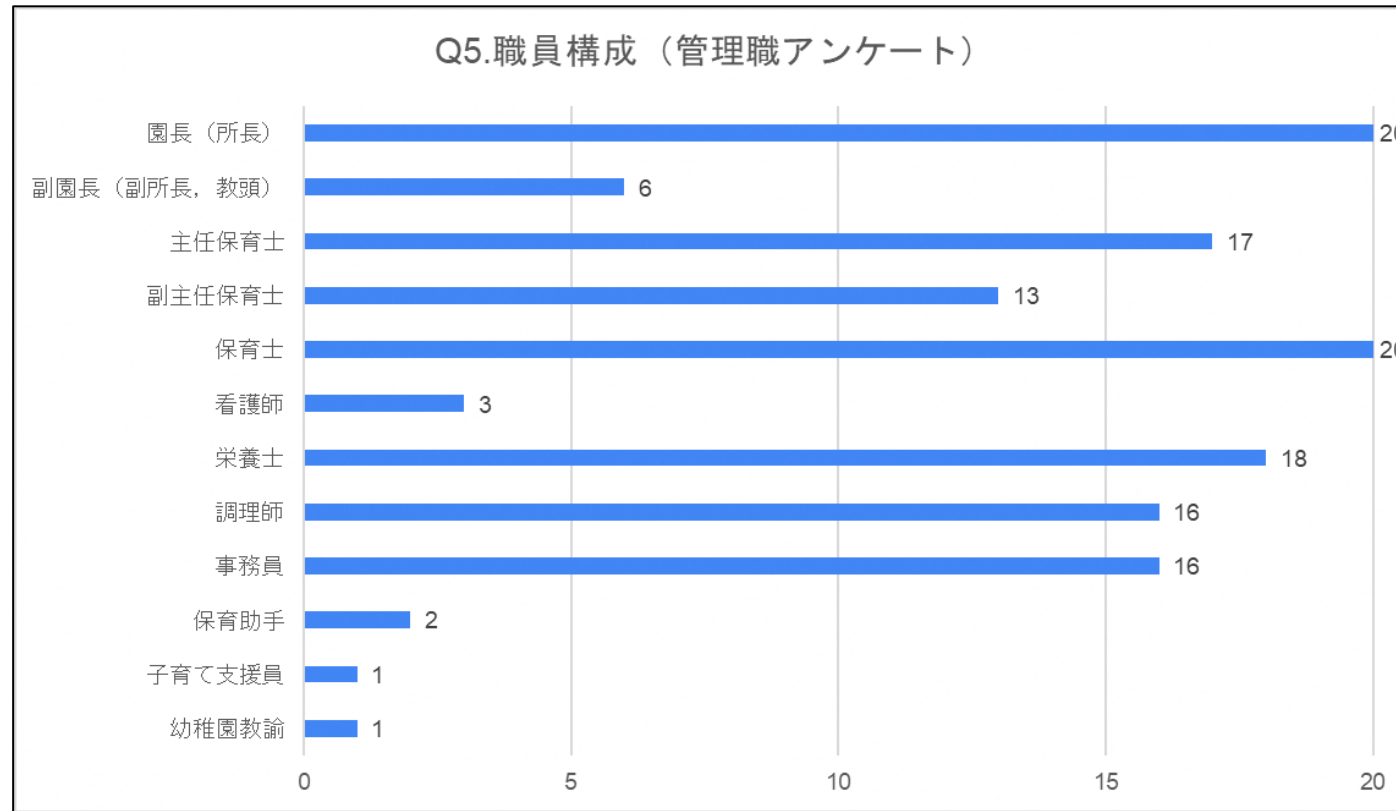
保育者10～15人未満の園が12園（60%）
で最も多い。

中規模園（100人以下）が多くを占めている。
保育者集団として10～15人未満の園が最も多い。

（補足）

今回の調査では、定員数，年齢ごとの在園児数およびクラス数を尋ねる質問を設けなかったため、定員に対する充足率および園児数及びクラス数に対する保育者の配置基準に対する充足率は分からない。

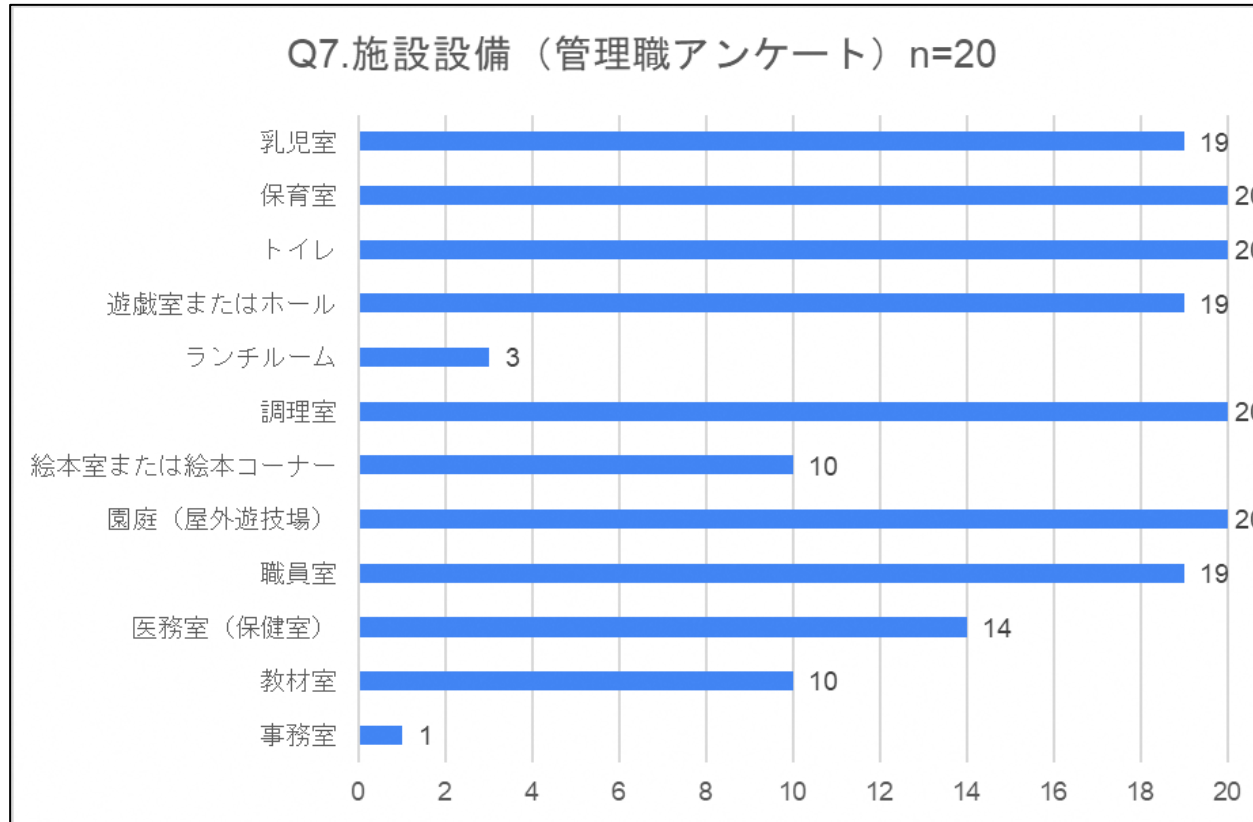
職員構成



栄養士，調理師，事務員は多くの園（80%以上）で勤務している。
保育士のリーダー的役割を果たす，主任保育士（85%），副主任保育士（65%）も多くの園で勤務している。

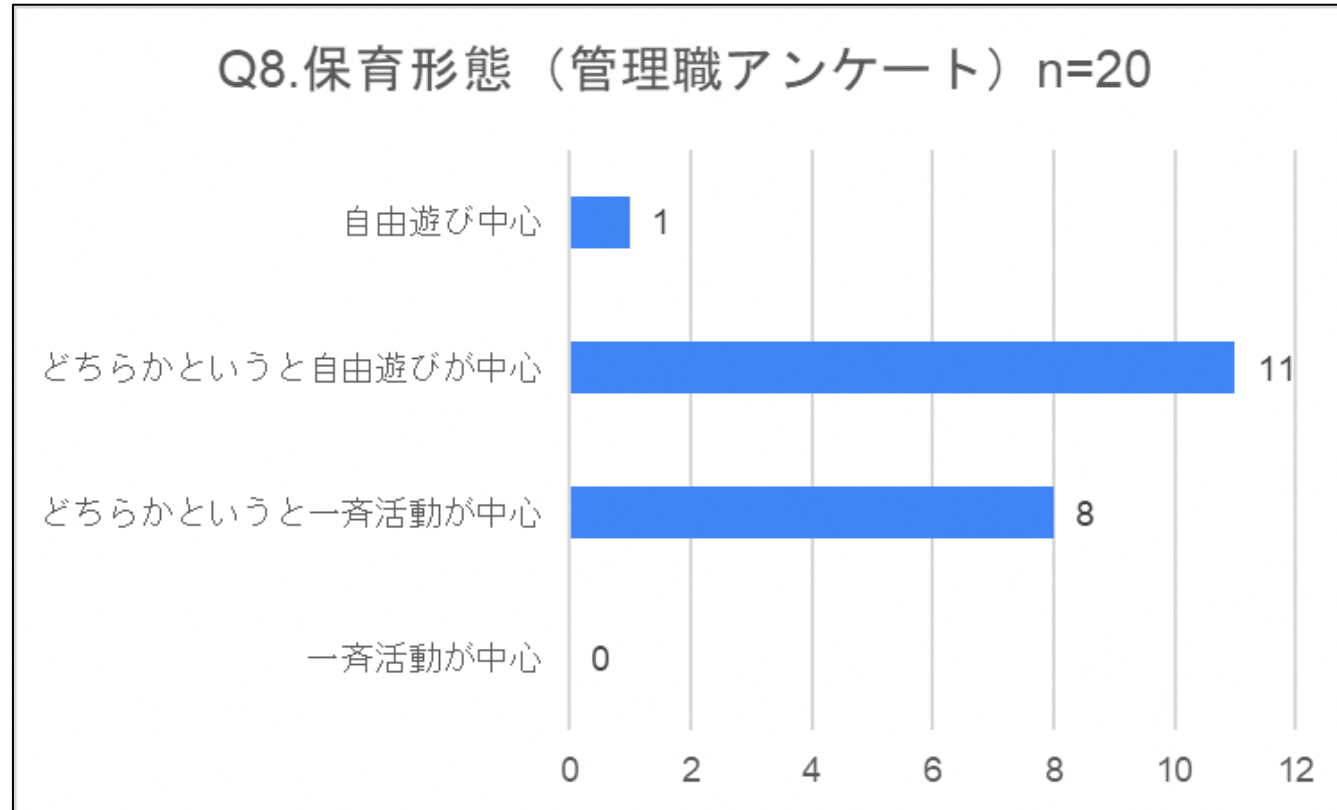
保育士以外の専門職も保育へ参加。
主任・副主任保育士（ミドルリーダー）の存在。
ミドルリーダーを中心とした保育者集団の育成の可能性。

施設設備



職員が集い、対話する場所になりうる「職員室・事務室」は全ての園で設置
保育者の教材研究や子どもの遊びを支える「教材室」は半数の園で設置

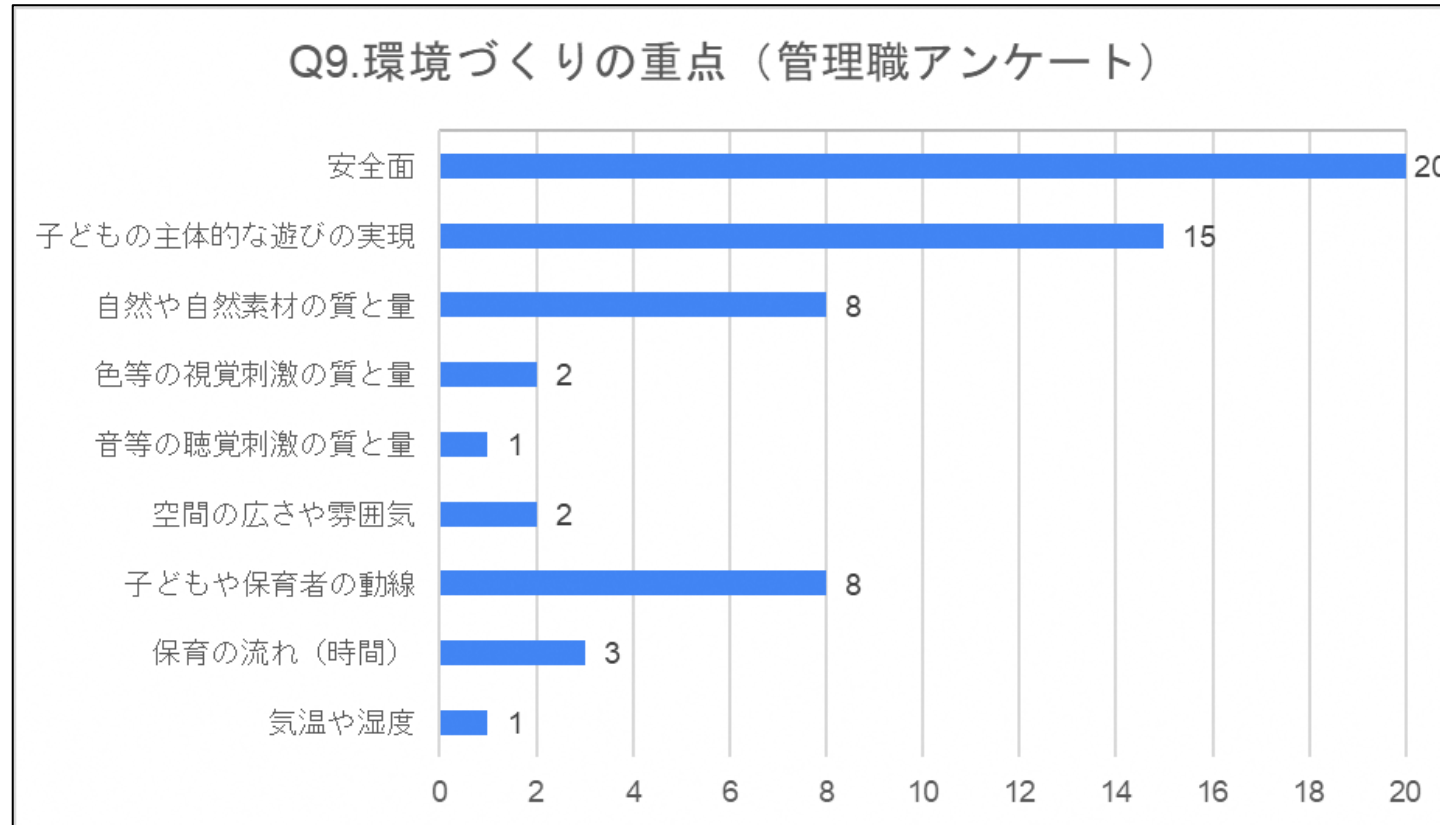
保育施設（管理職）が認識する保育形態



「自由遊びが中心」「どちらかというとも自由遊びが中心」の回答を合わせると12施設（約6割）ある。

一斉に同じ活動を行う形態から、子どもの興味関心に合わせた活動の形態を好む傾向
⇒形態の変更だけでなく、“子ども一人一人の個が大切にされているか”が重要

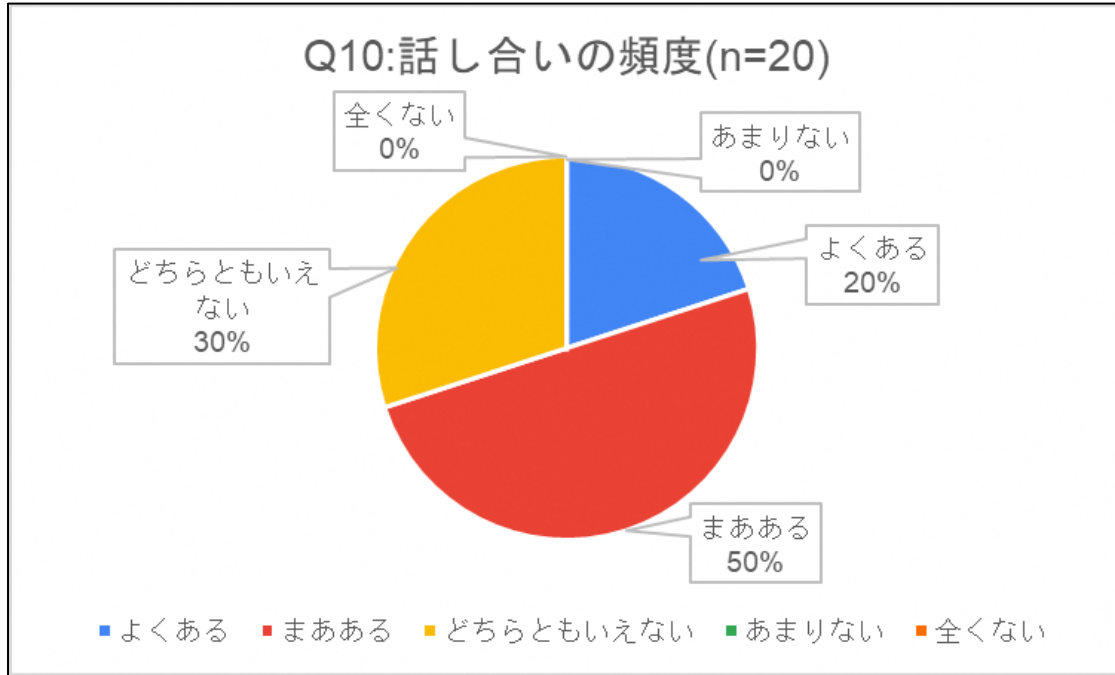
保育環境をつくる際に大切にしていること



「安全面」は全ての園が環境づくりで大切にしている。
「子どもの主体的な遊びの実現」も多くの園で大切にされている。

環境づくりの課題

①職員間での対話の有無と内容



保育環境づくりについて話し合う内容 (n=22)

| 項目 | 度数 | 例 |
|-------------|----|--|
| 主体的・持続性・広がり | 6 | ・主体性を育む環境構成 ・子どもが主体的に行動できるための保育者の声掛けや行動 |
| 子どもの興味関心 | 4 | ・子どもがどんなことに興味関心をもっているか |
| 安全面 | 4 | ・子どもの安全性 |
| 自然・自然物 | 3 | ・自然物を園庭の中にどうとりいれるか |
| 遊び | 2 | ・季節の遊びの取り入れ方 |
| その他 | 3 | ・保育形態 ・保護者への理解、保育者の配置 |

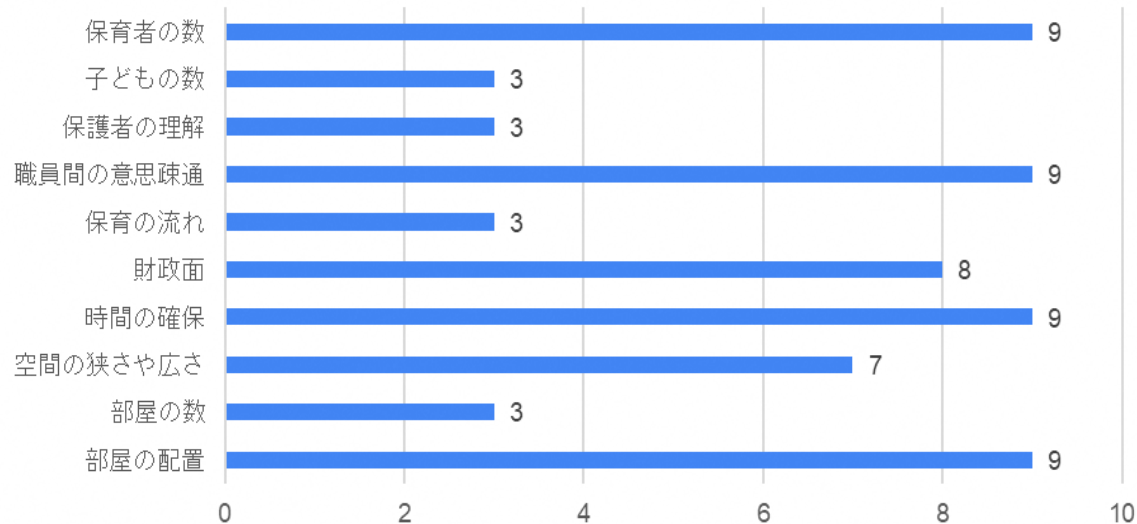
主体的な活動を引き出すための環境(6), 子どもの興味関心は何かを捉える内容(4)が多い。

「よくある」「まあある」と回答した園が70%

職員間での話し合いは多くの園でなされている。
主体的な活動を引き出す保育者の援助, 子ども理解の内容が環境づくりの
話題として挙がっている。

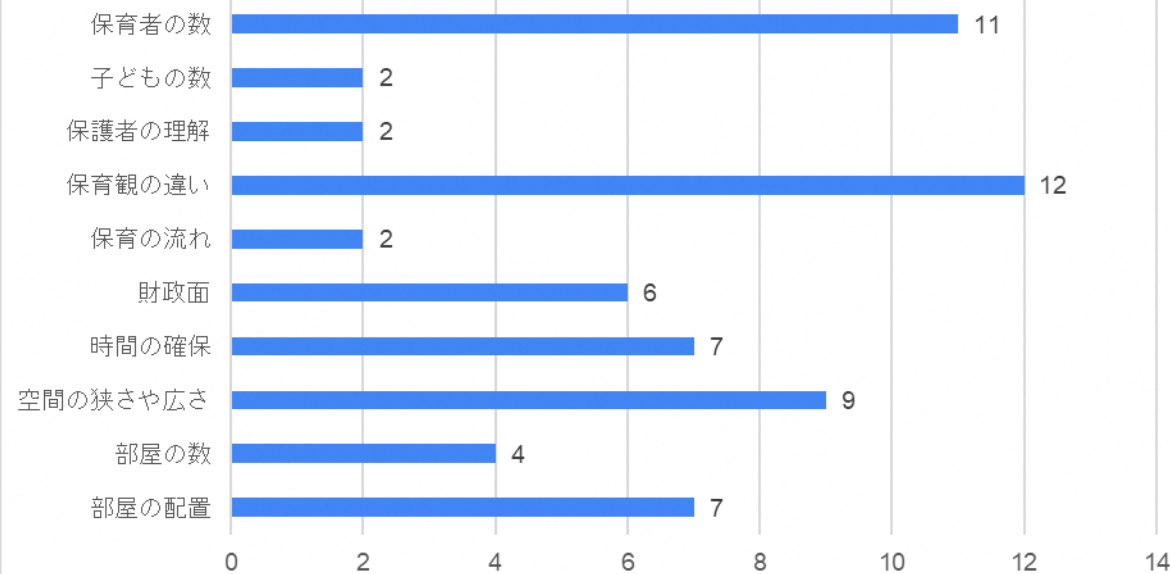
②環境づくりに対する難しさ

Q12.環境変更の際の困難要因（管理職アンケート）



「保育者の数」「部屋の配置」（構造の質）
 「時間の確保」（実施運営の質）
 「職員間の意思疎通」（プロセスの質）

Q13.主体的な遊びを保障する環境づくりの困難要因(管理職アンケート)



「保育観の違い」（プロセスの質）
 「保育者の数」「空間の狭さや広さ」（構造の質）

現在、環境づくりで課題となっていること (n=25)

| 項目 | 度数 | 例 |
|----------------|----|---|
| 部屋の条件・使い方 | 8 | ・遊戯室や保育室等の部屋の狭さ ・部屋の配置(安全面で目が行き届かない) |
| 職員間(保育者間)の意思疎通 | 8 | ・職員間の意思疎通と情報共有 ・保育観の違い |
| 人材不足 | 8 | ・慢性的に人材が不足している状況 ・配置できる保育士に限りがあり、遊びを制限させることがある |
| その他 | 1 | ・時間の確保が難しい |

「部屋の条件・使い方」「人材不足」(構造の質)

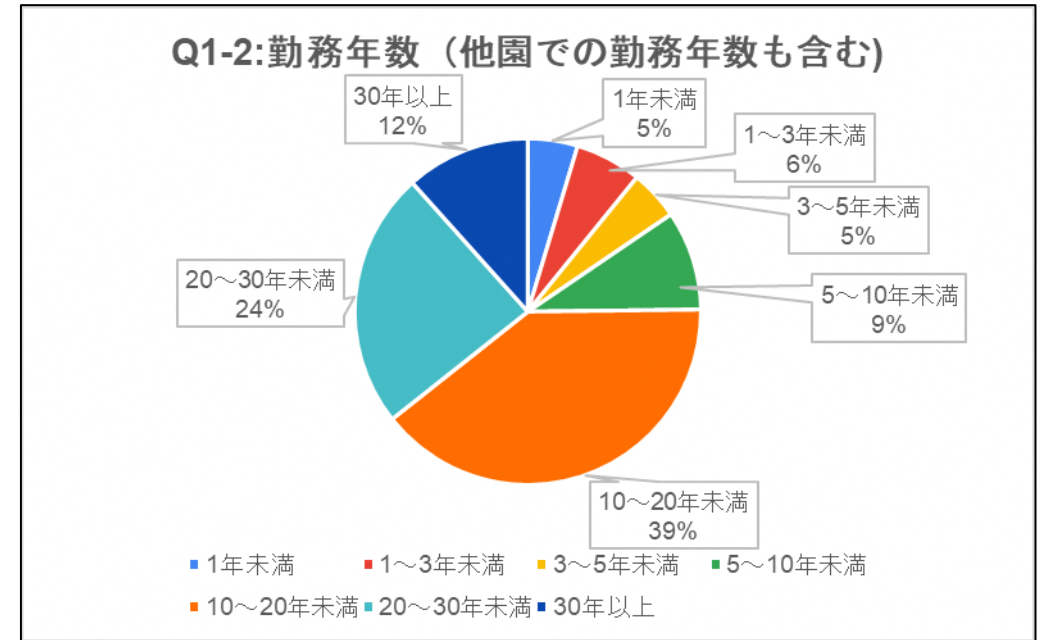
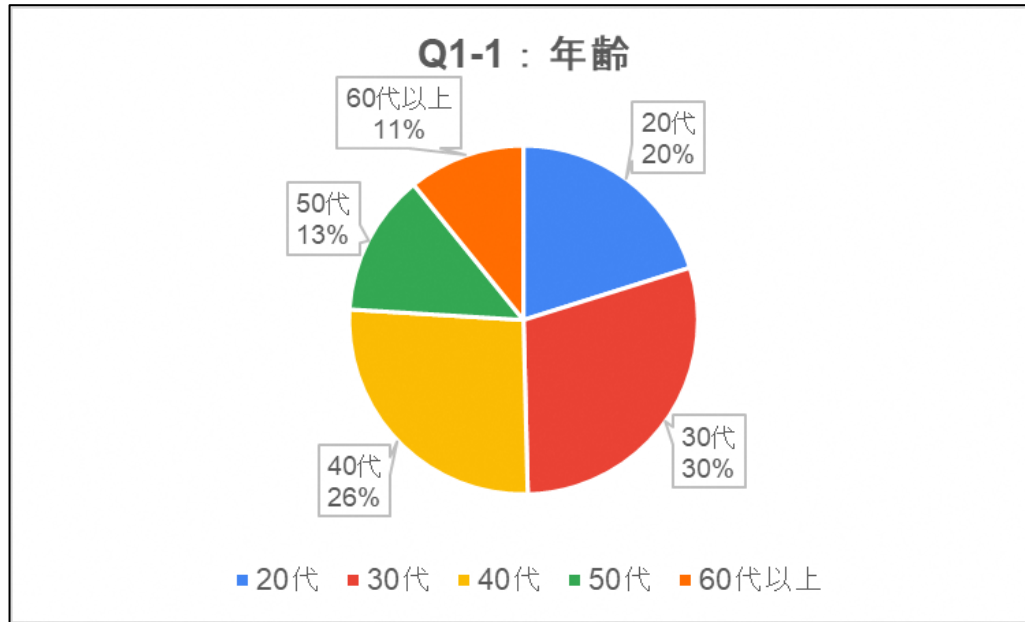
「職員間(保育者間)の意思疎通」(プロセスの質)が課題として挙がっている。

園の努力のみでは解決しない内容(構造の質)が課題として挙がっている。一方、保育者間の相互作用である内容(プロセスの質)も挙がっており、「情報共有」のあり方への工夫が必要である。

★保育者向けアンケート

- ・ 311名（28か所）送付，129名回答（回収率41.5%）
- ・ 分析の際、それぞれの質問において完全回答のみを分析対象として分析を行った。

回答者の属性



※右図のように、勤務年数により「若手」「中堅（前期）」「中堅（後期）」「ベテラン」の4群を設け、勤務年数による違いがあるかどうか、検討した。

| グループ | 勤務年数 | 人数 | 計 | 129 |
|--------|----------|----|----|-----|
| 若手 | 1年未満 | 6 | | |
| | 1~3年未満 | 8 | | |
| | 3~5年未満 | 6 | | |
| 中堅(前期) | 5~10年未満 | 12 | 12 | |
| 中堅(後期) | 10~20年未満 | 51 | 51 | |
| ベテラン | 20~30年未満 | 31 | 46 | |
| | 30年以上 | 15 | | |

保育環境の意義や必要性について (Q2)

Q2-1：保育を行う上で、保育環境は重要だと思いますか？(5件法)

「とても思う」(114名, 88%), 「まあ思う」(15名, 12%)

Q2-2：保育環境は子どもの価値観や行動に影響を与えますか？(5件法)

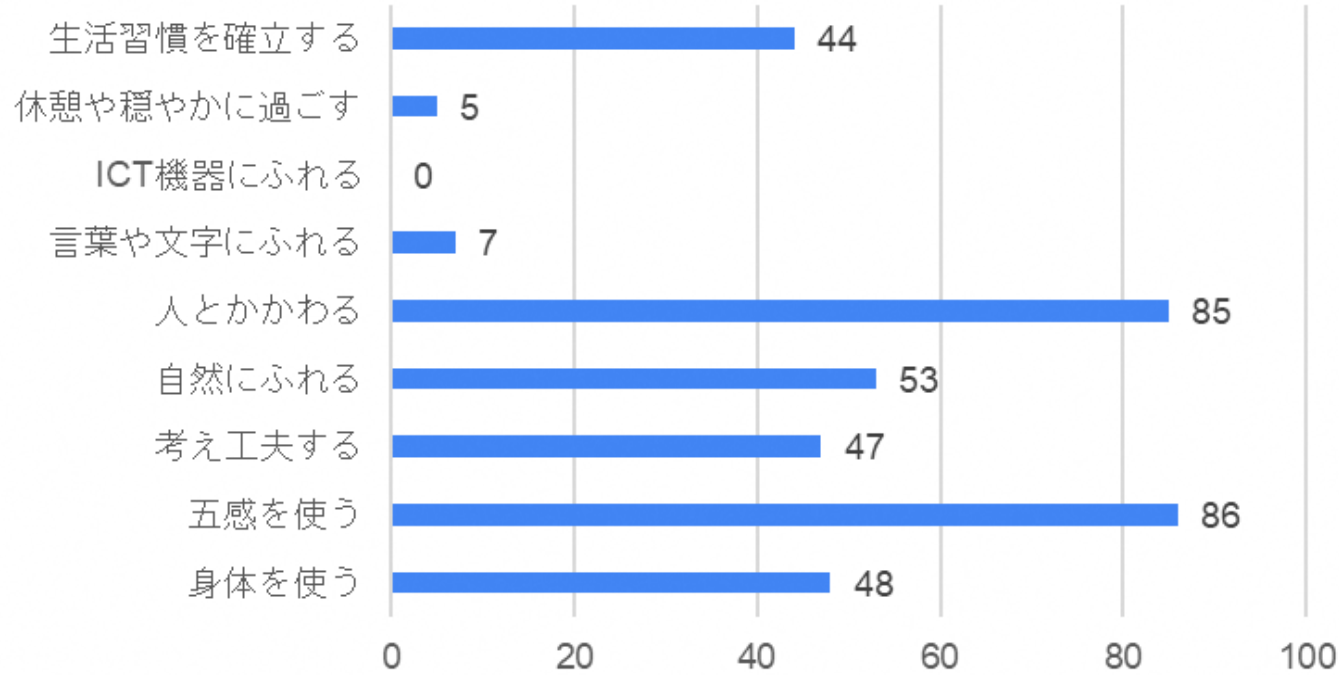
「とても思う」(101名, 78%), 「まあ思う」(26名, 20%), 「どちらともいえない」(2名, 2%)

Q2-4：保育を行う上で、保育者が保育環境を構成することは必要だと思いますか？

「とても思う」(93名, 72%), 「まあ思う」(35名, 27%), 「どちらともいえない」(1名, 1%)

多くの保育者は、保育環境の重要性や子どもへの影響を認識している。
また、
保育者自身が保育環境をつくることの必要性を感じている。

Q2-3:子どもの成長にとって必要だと思う環境は？



全体では、
 「五感を使う」(86, 22.9%)
 「人とかかわる」(85, 22.7%)
 「自然にふれる」(53, 14.1%)
 が上位にあがっている。

勤務年数により、順位に違いがみられる。

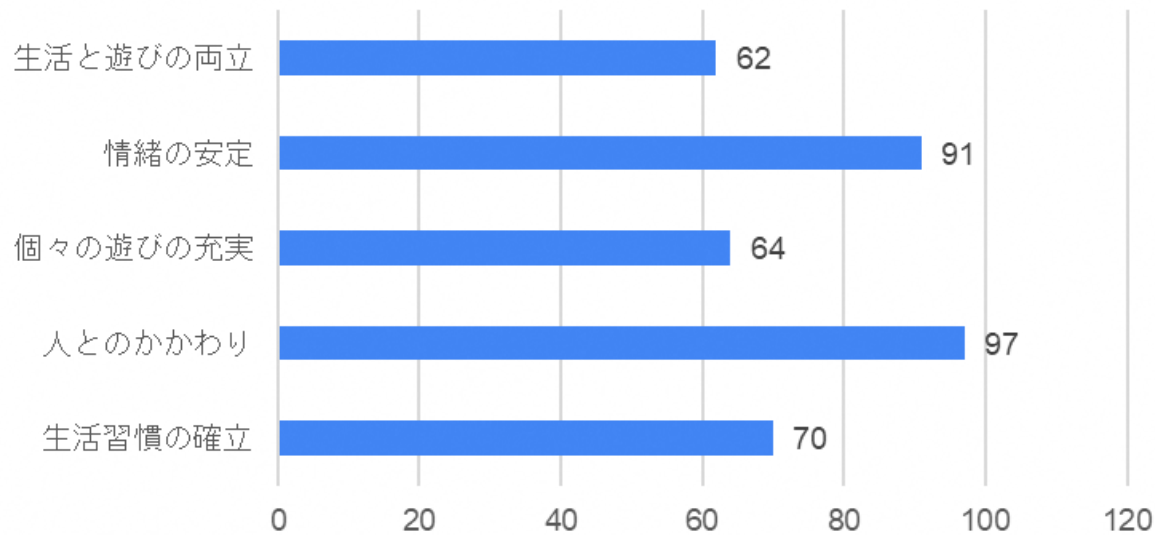
| | 1~5年未満 | 5~10年未満 | 10~20年未満 | 20年以上 |
|---|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 1 | 五感を使う(26.7%) | 五感を使う(27.8%) | 五感を使う(24.0%) | 人とかかわる(24.8%) |
| 2 | 人とかかわる(23.3%) | 人とかかわる(22.2%) | 人とかかわる(20.7%) | 自然にふれる(19.4%) |
| 3 | 身体を使う(15.0%) | 身体を使う(19.4%) | 考え工夫する(14.0%) | 五感を使う(18.6%) |

※「自然にふれる」6番目

※「自然にふれる」6番目

※「自然にふれる」4番目

Q2-5:保育室の機能(役割)として大切だと思うことは何ですか？



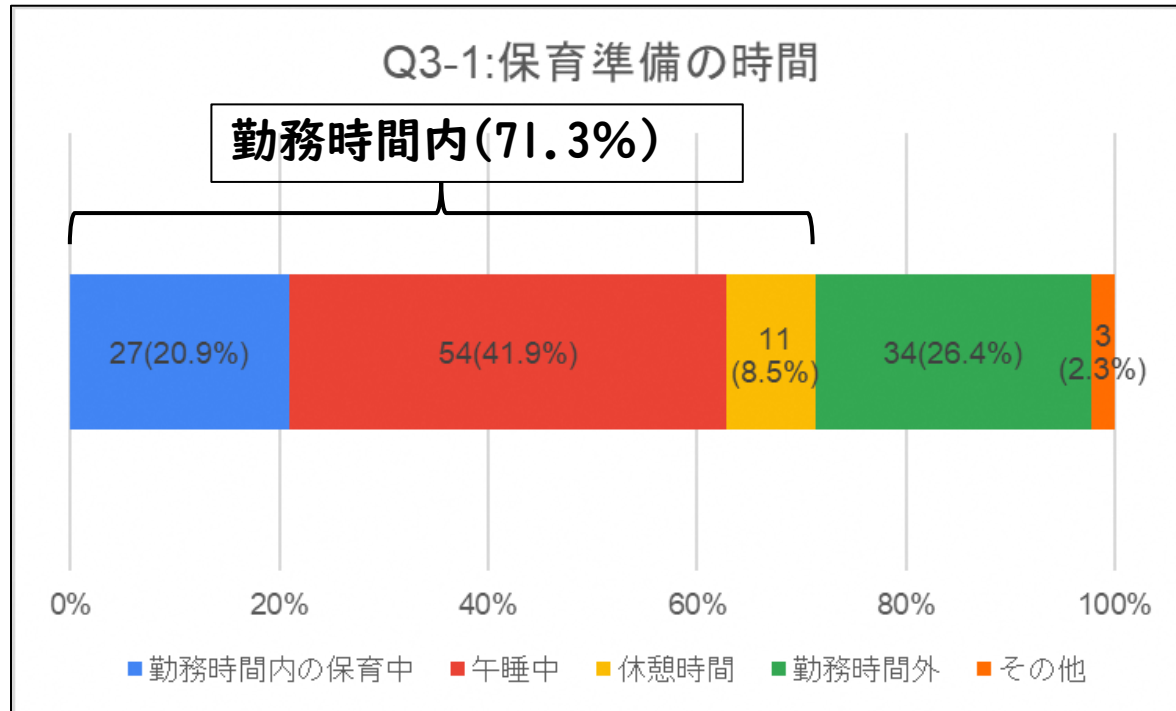
全体としては、
 「人とのかかわり」(97, 25.3%)
 「情緒の安定」(91, 23.7%)
 「生活習慣の確立」(70, 18.2%)

| | 1~5年未満 | 5~10年未満 | 10~20年未満 | 20年以上 |
|---|------------------------------------|---------------------------------|----------------|-----------------|
| 1 | 人とのかかわり(26.7%) | 生活と遊びの両立(25.0%) | 情緒の安定(24.2%) | 人とのかかわり(27.4%) |
| 2 | 生活習慣の確立(23.3%) 情緒の安定(23.3%) | 人とのかかわり(22.2%) | 人とのかかわり(23.5%) | 情緒の安定(24.4%) |
| 3 | 個々の遊びの充実(13.3%) 生活と遊びの両立(13.3%) | 個々の遊びの充実(19.4%) 情緒の安定(19.4%) | 生活習慣の確立(16.3%) | 個々の遊びの充実(17.0%) |

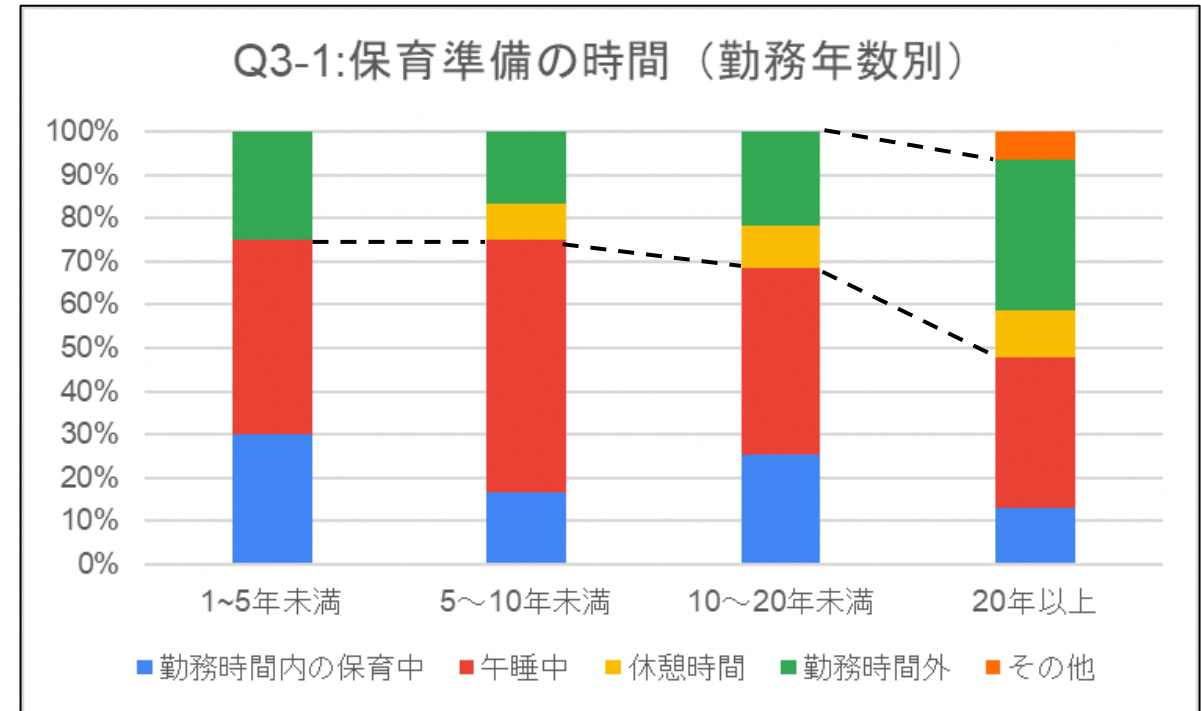
保育者は、「人とのかかわり」が子どもの成長に必要と感じると共に、保育室の機能(役割)としても重要であると感じている。

保育の準備について (Q3)

- ・ 保育準備はいつ行っているのか。

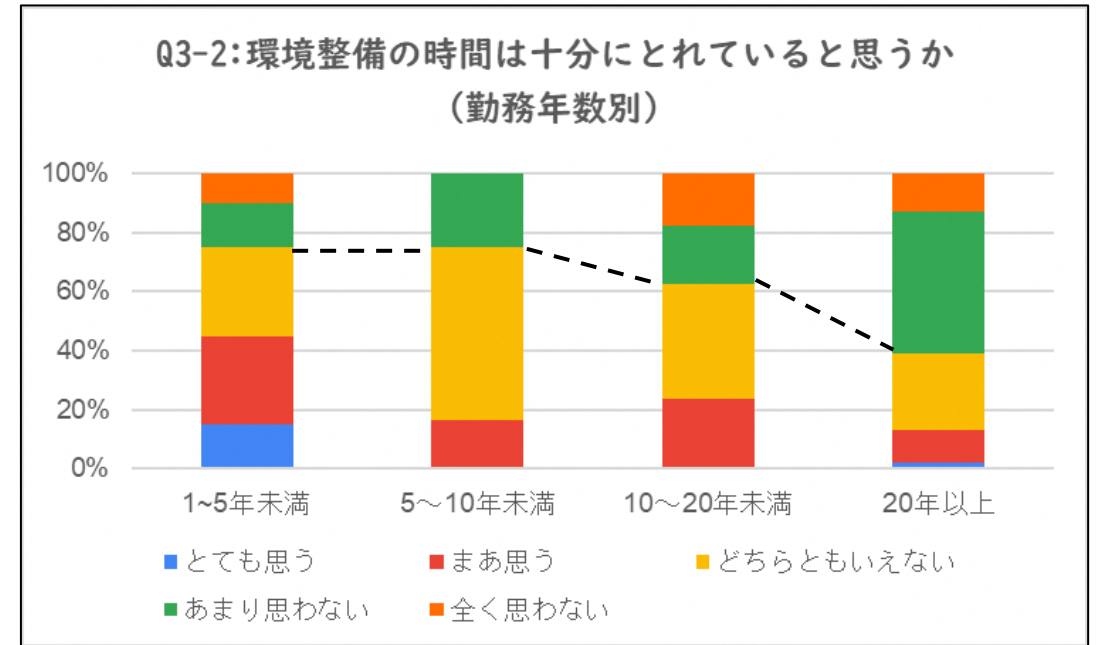
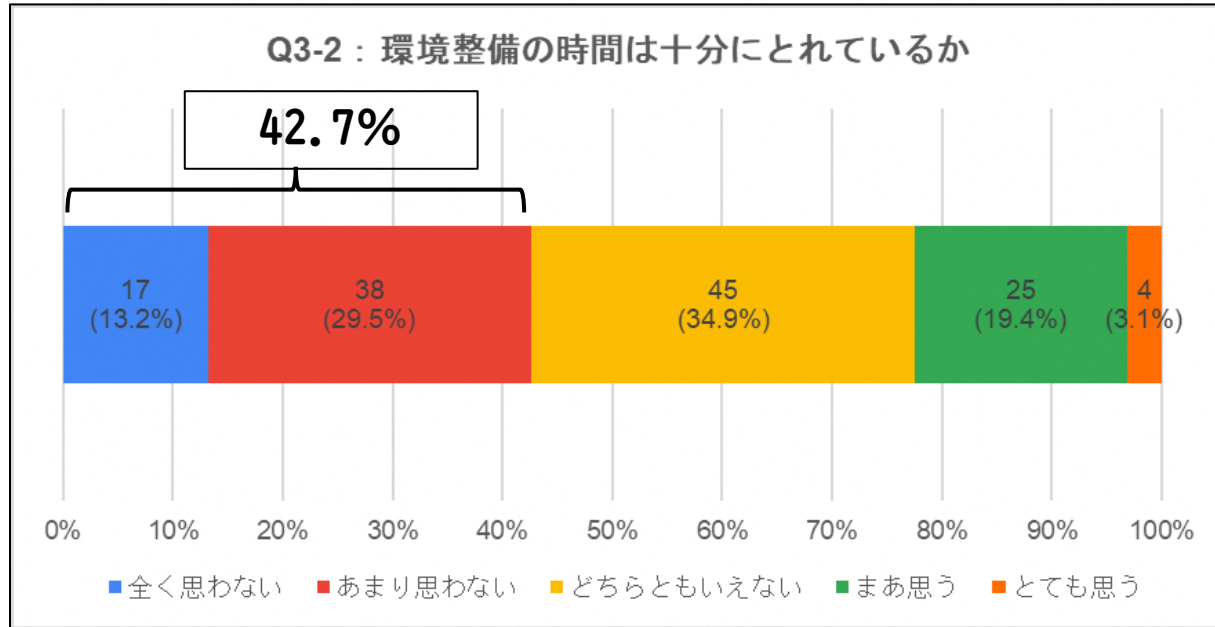


勤務時間内が71.3%で多くを占める。
ただし、休憩時間や子どもと関わる保育時間中



勤務年数が増えるほど、「休憩時間」「勤務時間外」の回答が多くなっている。

・保育準備の時間に対する考え

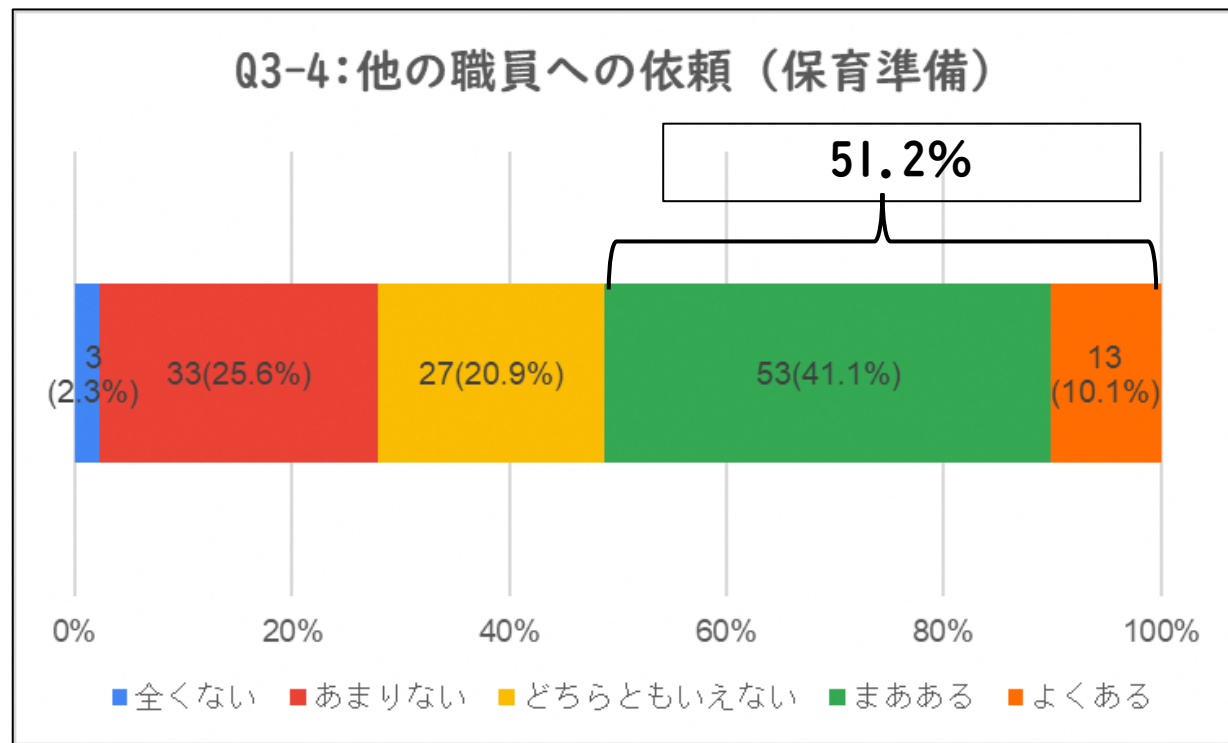


「全く思わない」「あまり思わない」が42.7%

勤務年数が増えるほど、「全く思わない」「あまり思わない」が多くなる。

42.7%の保育者は、保育準備の時間が足りないと感じている。
勤務年数が増えるほどより感じる傾向にある。

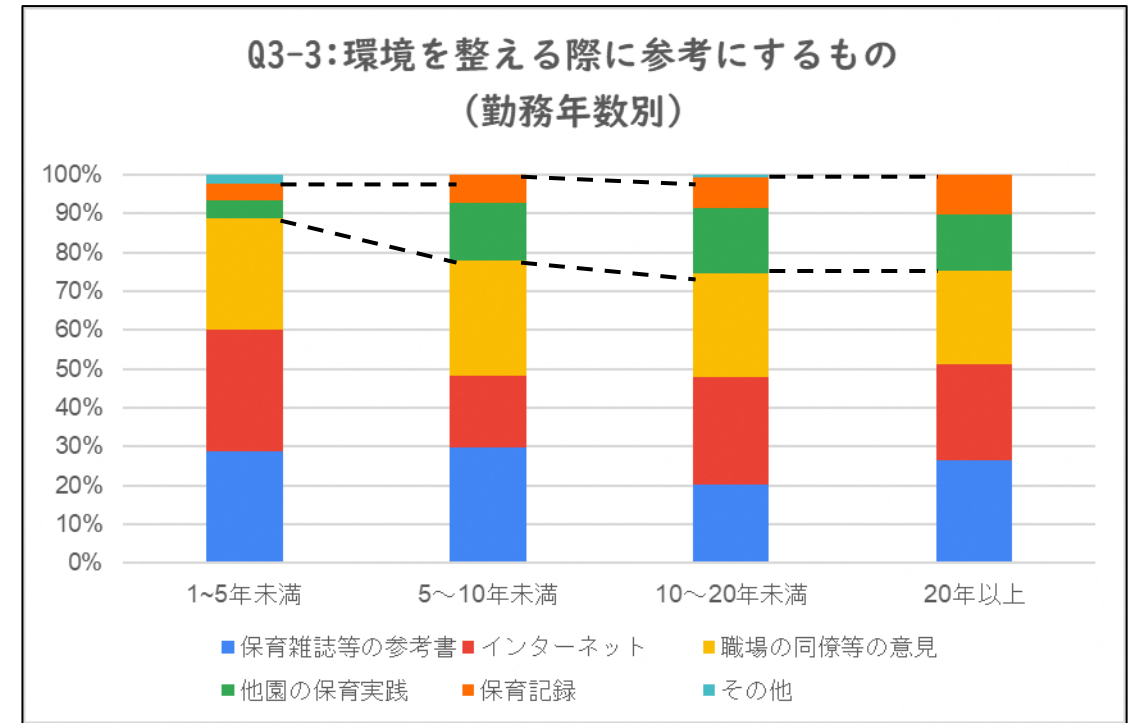
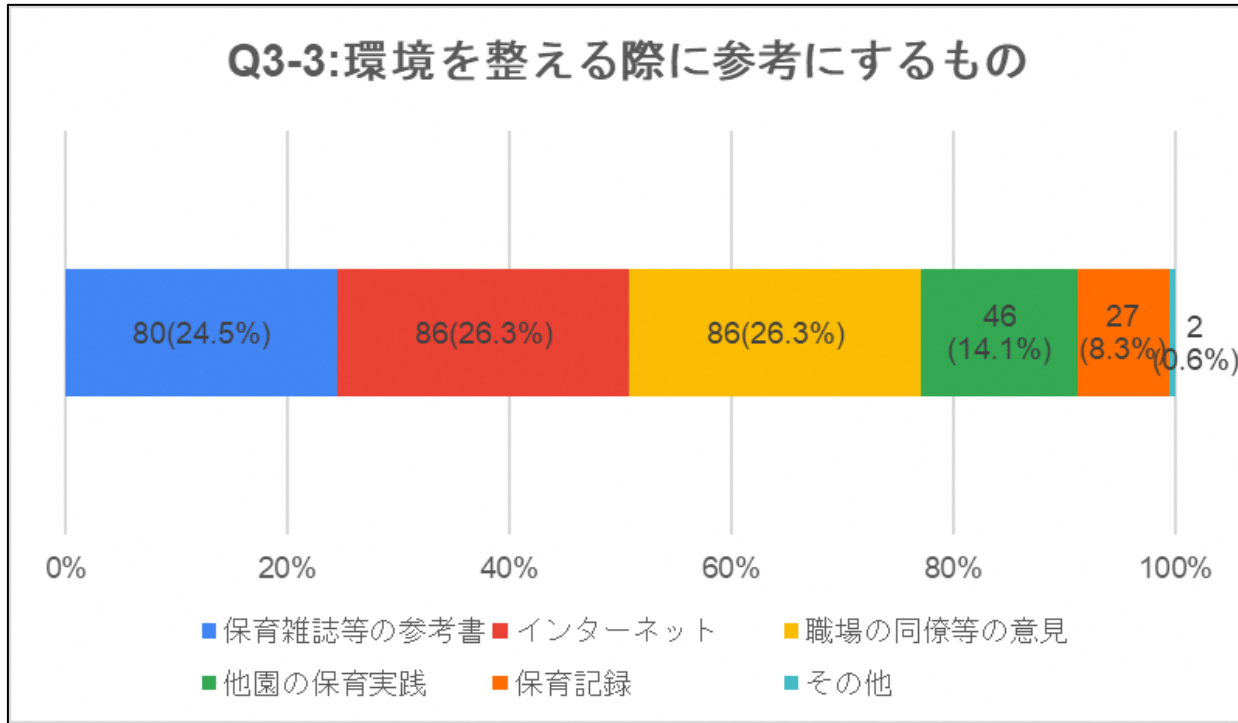
・他の職員への協力依頼（環境整備に関して）



| 依頼内容 | 度数 |
|-------------|----|
| 製作活動の下準備 | 17 |
| 手作りおもちゃ・作り物 | 9 |
| 行事で使う物の準備 | 3 |
| 物品の準備 | 15 |
| 環境構成 | 3 |
| 整理整頓・点検 | 2 |
| 壁面 | 4 |
| 子どもの見守り | 9 |
| 物の移動 | 13 |
| 意見を聞く | 7 |
| 特になし | 4 |
| その他 | 2 |

「まあある」「よくある」を合わせると51.2%
 依頼内容としては、製作活動の下準備，物品の準備，物の移動が多い。

・保育室や遊びの環境を整える際に参考にするもの

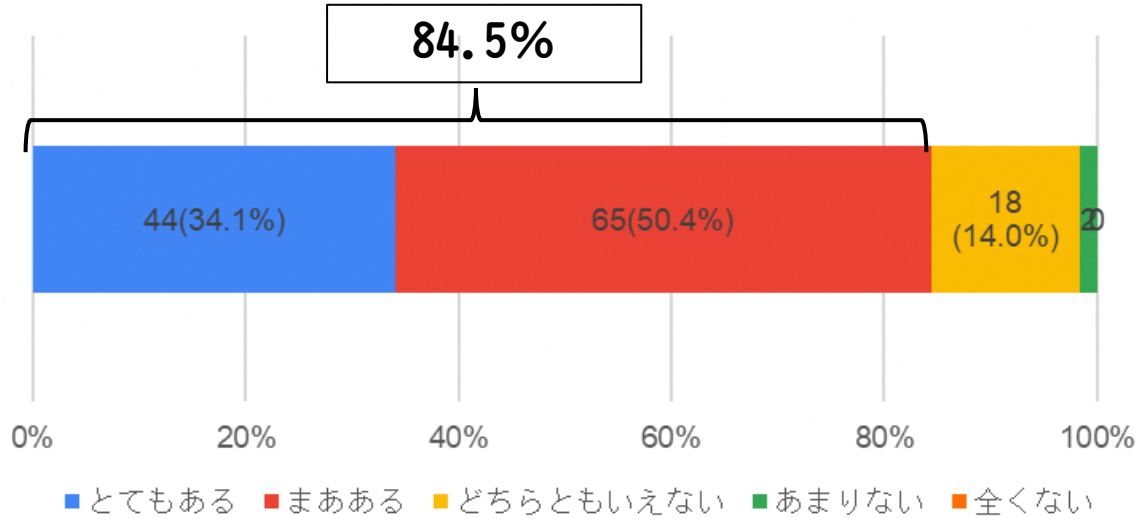


「保育雑誌等の参考書」「インターネット」「職場の同僚等の意見」を利用し環境を整えている。
「他園の保育実践」「保育記録」の利用は少ない（勤務年数別では少し差がある）。

より子どもの姿から保育環境を考えていくためには、環境づくりに活用できる「保育記録」のあり方を検討することも必要ではないか。

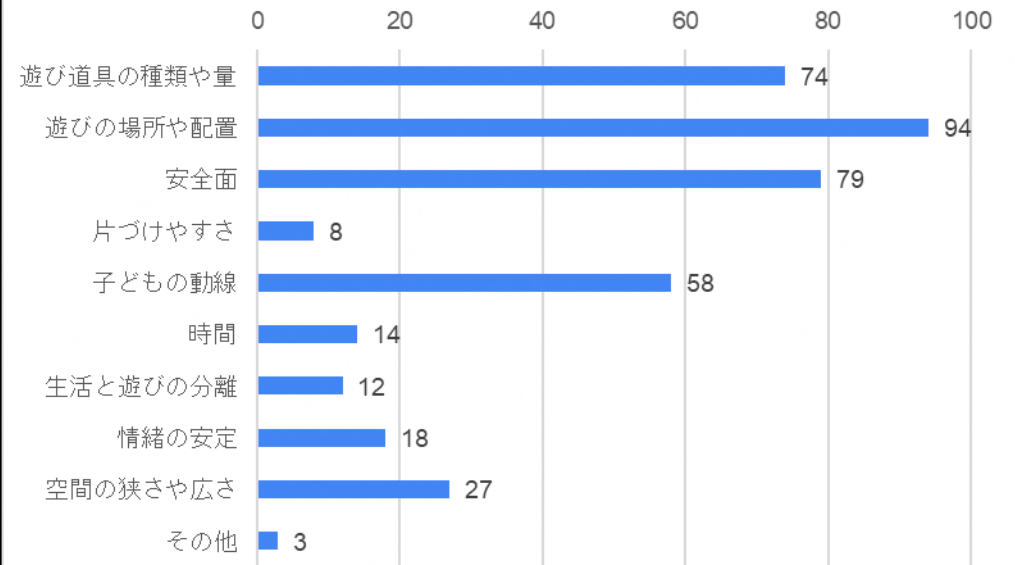
保育室や遊び場の環境構成について

Q4-1: 保育室の既存環境を活かしながら子ども主体の生活や遊びを保障することの難しさ



「とてもある」「まあある」を合わせると84.5%

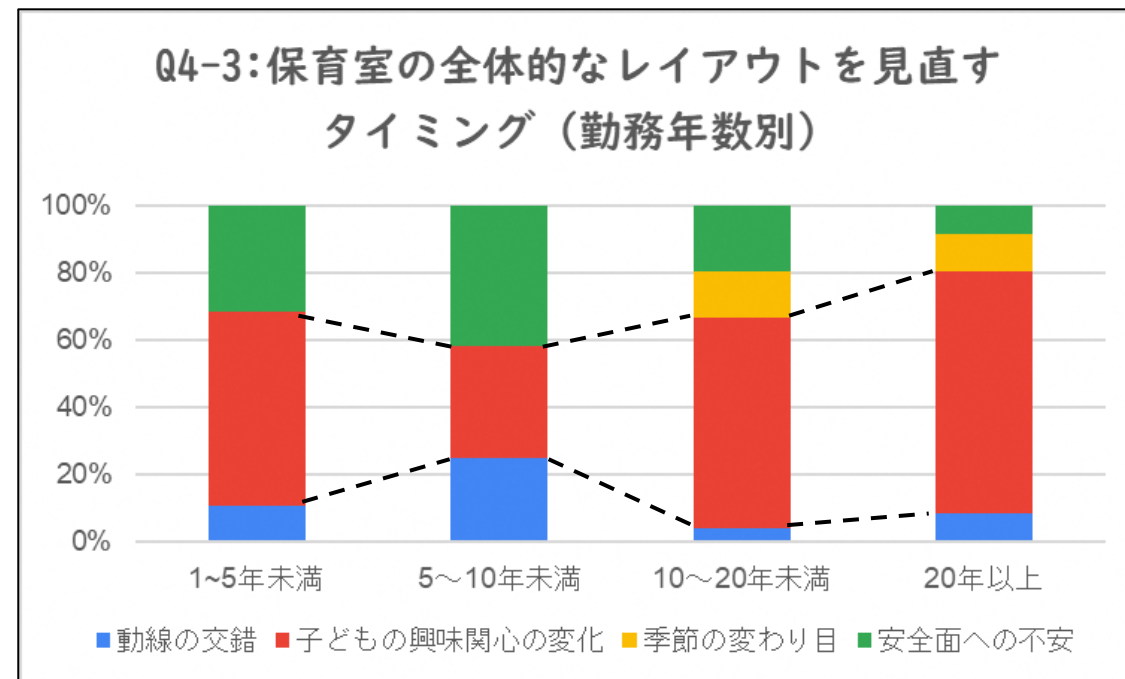
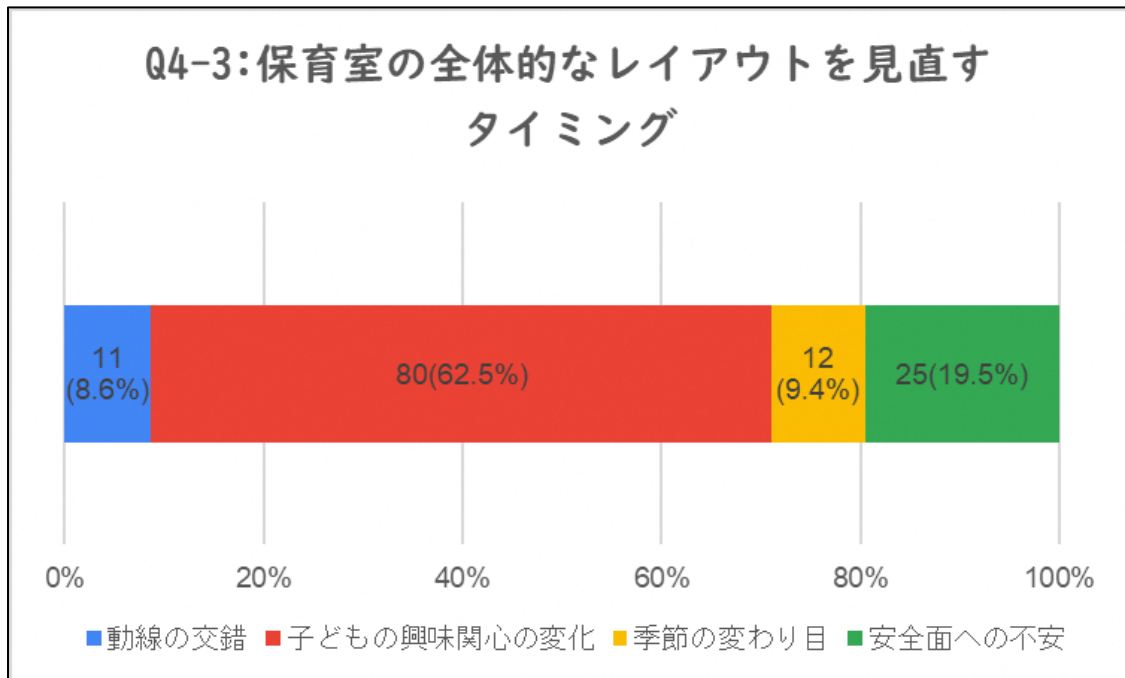
Q4-2: 子どもの興味関心や発達を踏まえ、保育室や子どもの遊び場を構成する時に考慮すること



「遊びの場所や配置」「安全面」「遊び道具の種類や量」が多い。

- 多くの保育者が既存の環境を活かしながら子ども主体の生活や遊びを作ることに難しさを感じている。
- 環境構成を行う際には、場所や配置、道具の種類や量、という物や空間の選び方が工夫されている。また、安全面への配慮も重要な要素となっている。

・環境変更のタイミング

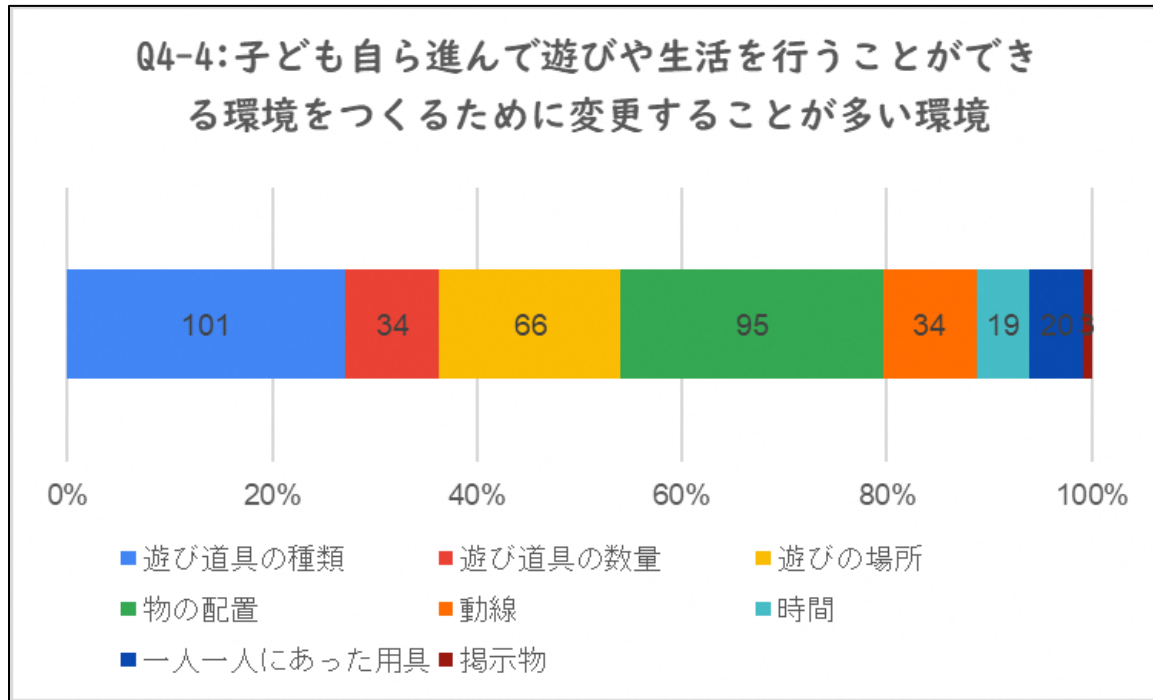


「子どもの興味関心の変化」が最も多い。

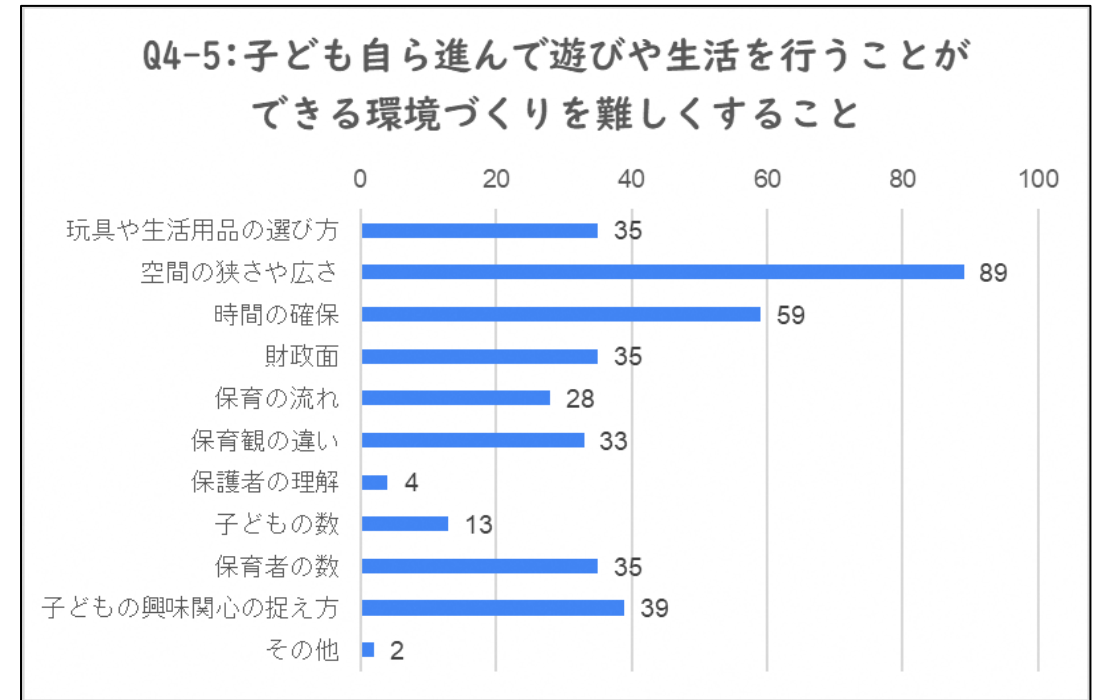
「子どもの興味関心の変化」を勤務年数別にみると、10年以上の保育者の回答が多い。また、「安全面への不安」は10年未満の保育者の回答に多い。

保育室の全体的なレイアウトは、「子どもの興味関心の変化」に合わせて変更する保育者が多く、子どもの姿をどのように捉えるのか、により保育室の環境構成が左右されると予想される。また、勤務年数が10年未満の保育者にとっては、「安全面への不安」も環境変更の要因として大きい。

・子ども自ら進んで活動をするための環境



「遊び道具の種類」「物の配置」「遊びの場所」が多い。



「空間の狭さや広さ」（構造の質）「時間の確保」（実施運営の質）「子どもの興味関心の捉え方」（プロセスの質）が多い。

子ども自らが進んで活動できる環境づくりにおいて、物の選び方・空間の構成に変更を加える保育者が多い。一方、環境づくりを難しくする要因として、空間の大きさ、時間の確保とともに、乳幼児の発達への理解や興味関心を捉えることも要因としてあがっている。

物の特性や特徴への理解、“子どもの理解”が子ども自ら進んで活動するための環境づくりを進める課題や不安として保育者が感じているのではないかと予想される。

環境構成に対する保育者の困り感として考えられること（アンケートより）

「空間の広さや狭さ」（施設の構造的な課題）

- ⇒環境づくりで「安全面」と「子どもの主体的な遊びの実現」の両方を重視（スライド11）
- ⇒既存環境を前提とした環境づくりへの難しさ（スライド13, 23, 25）
- ⇒「空間の広さや狭さ」は子どもの主体的な生活や遊びの環境をつくる際に課題となる（スライド13, 25）

「時間の確保」（実施運営の課題）

- ⇒保育準備の時間（スライド19, 20）。特に、勤務時間内での時間の確保
- ⇒「時間の確保」は子どもの主体的な生活や遊びの環境をつくる際に課題となる（スライド25）

「情報共有」（保育プロセスの課題）

- ⇒職員間での話し合いは多くの園でなされている（スライド12）
- 管理職は「保育観の違い」（スライド13, 14）が課題として
- 保育者は「子どもの理解（興味関心の捉え, 教材選択）」（スライド25）が課題として

5. 結果：調査②

**調査②：保育環境の困り感の具体的事例
収集と改善方法の検討（実地調査）**

A保育所では、これまでの一斉活動による保育から子ども主体の保育へと保育形態を変更し、取り組みを行っている。今回の調査では、その具体的内容と保育者の思いを伺った。

取り組みの概要

1. 取り組みを始めた時期

2025年度（2025年4月）から

2. 取り組みを始めたきっかけ

園長の強い思い

⇒時代の変化に合わせて保育を変えていくべきだと思った。

選ぶ力、コミュニケーション力がこれからの子どもに必要なと思った。

特に人とかかわる機会を増やしたいと思い、取り組みを進めてきた。

職員（先生方）の反応

研修などで「主体性」とよく聞くので方向性としては良いと思った。では、それを具体的に進めるにはどうするかイメージができなかった。

保護者の反応

4月当初はどうなっていくのか不安も感じられたが、変更したこと（生活の仕方や行事のやり方）に対して受け入れてくれていると感じる。

3. 取り組みの主な内容（変更したこと）

- ①生活の仕方の変更：縦割りクラス，一斉活動から個々に合わせた活動
- ②行事の見直し：見せるから関わるへ 例）発表会⇒秋祭り

※年度当初に説明会を実施し、変更内容について丁寧に保護者への説明を行っている。

取り組み始めての変化

子ども

①友達とのかかわりの広がり

- ・ 0歳児の子どもたちは年長の子ども(1歳児)の様子を見て、真似る姿が見られる。
- ・ 同じ年齢だけで遊ぶのではなく、様々な年齢の子と遊んだり生活したりするようになった(3・4・5歳児)。

②自分の思いを伝えてもいいと少しずつ感じる

- ・ (遊び道具を子どもが自由にだして遊べるような場所に置くようになり)はじめは遊び道具を全部出していたが、次第に子どもが使いたいものだけを出して遊ぶように(1歳児)。
- ・ 保育者からの指示を待って行動することが多かったが、子どもが環境にある物を「使ってもいい？」と言うようになった(3・4・5歳児)。

保育者

①声掛けの仕方を工夫

- ・ 「～してみる？」「何したい？」と子どもの思いをきく声掛けが増えた
- ・ 指示ではなく子どもが考えるような声掛けが増えた例)「〇〇ちゃん、汚れてるから着替えてね」
⇒「汚れている人は着替えてね」
- ・ トラブルの時など、すぐに声を掛けず子どもの様子を見てから声を掛けるようになった。

②環境のつくり方を工夫

- ・ 子どもが自分で出し入れや選択ができる物の配置
- ・ 子どもが自由に選択できる時間
→遊び方・友達・場所が選べるように

③職員間の意思疎通の必要性

- ・ 子どもの姿やちょっとした会話も含めてもっと先生たちで話したいと思うようになった。

※環境変更の取り組み（物の配置）

子どもの手の届く高さに（上から下へ）

0・1歳児，おもちゃの置き場所



2歳児，道具箱の位置



※保育者の関わりの事例

「やりたい」を一緒にみつける（2歳児）

朝の集まりの時に、子どもたちに何をしたい（遊びたい）か尋ねるようになった。4月は「ままごと」ばかりだったので、部屋にある遊び道具をみんなで見せて、どんな遊びがあるのか子どもたちが知ることができるようにしてきた。少しずつ、子どもたちがやりたいと言う遊びのバリエーションが増えてきたように思う。

子どもにとって気持ちいい午睡とは？（2歳児以上）

今まで、午睡の前にはパジャマに着替え、起床後に洋服に着替えるようにしてきた。午睡後の子どもの様子は様々で、おやつまでの時間にあわただしく着替えをすることが子どもにとって本当に気持ちいい午睡の時間になっているのだろうか、と疑問になった。職員で話し合い、午睡時のパジャマへの着替えをやめることにした。

取り組む中で見えてきた課題

子どもの姿として

- ・自分の思いを言葉にすることが難しい（特に3歳以上児）。
- ・「これやりたい」が見つかり、自分たちで遊びを進めていこうとする力が弱い。
- ・物や人への興味関心が弱い（感じにくい）。

保育者の関わり方や環境づくりとして

- ・子どもの「やりたい」「やりたくない」をどこまで尊重していいのかの線引きの難しさ。
- ・月齢の違いを考慮しつつ、それぞれの子どもが安全で落ち着いて過ごせる環境をどのようにつくるか。
- ・やりたいを引き出す、興味関心がもてる遊びの環境をどのようにつければよいか。
- ・子ども主体の中での生活習慣の身に付け方（特にトイレトレーニング）。
- ・縦割り保育での活動と同年齢のみでの活動の持ち方

保育を支える基盤として

- ・保育者間での情報共有の仕方（特に記録）に工夫がいる。
- ・事務作業を効率的に行うためのPC等の情報機器の不足。

6. まとめ

2つの調査を通して、保育の環境づくりに対する保育者の困り感とその背景を探ることを試みた。以下、困り感とその背景として考えられることについて示す。

1. 空間を構成することに対する困り感

保育の環境づくりを行う上で、その場所をどのような空間にしていくかは大切である。環境づくりにおいて、保育者は「安全面」と「子どもの主体的な遊びの実現」の両方を実現したいと考えているがそれを実現する難しさを感じていると予想された。その背景には、既存環境を活かしながらの環境づくり、特に「空間の広さや狭さ」という施設設備の問題、保育準備をするための「時間の確保」である実施運営の課題があると考えられた。

2. 子どもの理解と職員集団の形成に対する困り感

保育実践は、子どもの理解をもとにして保育者が協力し合いチームとなって行うことが必要である。そのため、環境づくりにおいても、子どもの理解と職員間での情報共有は大切となる。保育者は、環境づくりにおいて空間の大きさ、時間の確保と共に、「子どもの興味関心の捉え方」「玩具や生活用品の選び方」など個々の子どもの行動から発達等を捉えることについて難しさを感じていると予想された。また、職員間での話し合いは多くの園でなされ、子ども主体の活動を引き出すための保育者の援助や子どもの理解についても話し合われていたが、子ども主体の保育に取り組み始めた園（調査②）では、保育者間での情報共有の必要性と共有するための工夫が課題としてあがっていた。そのため、環境づくりの基盤となる子どもの理解を一人一人の保育者が深めていける職員集団の形成とそれを支える仕組み（保育記録などのツール、保育準備や職員での話し合いの時間の確保等）に対する課題があると考えられた。

7. 今後の課題

今回の調査を通して、保育の環境づくりに対する保育者の困り感には、「空間を構成することに対する困り感」と「子どもの理解と職員集団の形成に対する困り感」があるのではないかと考えられた。また、これらは保育者個人の力量で解決していけるものではなく、園全体で取り組むことにより解決へと向かう系口がみえてくるものではないかと考えられる。今後はその系口になる取り組みをより詳細に捉えるため、“子どもの主体性を育む保育”の具体的な事例収集を進めていきたい。

8. 謝辞

本調査の実施に当たり、アンケートにご協力いただきました浜田市内の幼稚園・保育所・認定こども園の皆様、実地調査にご協力いただきましたA保育所の皆様にお礼申し上げます。

島根県立大学短期大学部 保育学科 准教授 小林 美沙子
浜田市健康福祉部 子ども・子育て支援課 保育所幼稚園係 係長 福間 裕介
浜田市幼児教育センター 幼児教育アドバイザー 長尾 佳保
岸本 千穂